

氏名	鈴木 信一
学位の種類	博士 (比較文明学)
報告番号	甲第414号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	即興ダンスにおけるカップリングと動作選択可能性拡大・自己治癒に関する研究
審査委員	(主査) 佐々木 一也 林 文孝 副島 博彦

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

当該論文は8章27節67小節からなる。小節以下は省略して、章立てを示す。

1. 序章
 - 1-1. 目的
 - 1-2. 背景
 - 1-3. 方法
 - 1-4. 先行研究
2. ハイデガー哲学による即興ダンスの実存論的検討
 - 2-1. 態度における実存的性格
 - 2-2. 動作そのものの実存的性格
 - 2-3. 実存的性格における意義と課題
3. メルロ＝ポンティにおける身体運動論
 - 3-1. 身体図式と包み合い
 - 3-2. 肉と絡み合い
 - 3-3. 身体運動論における課題と展望
4. 即興ダンスにおける動作単位産出システムの分析
 - 4-1. 動作単位の産出システム
 - 4-2. 恒常的に連動する変数の考察
 - 4-3. 選択的に連動する変数の考察
 - 4-4. 変数の選択・連動と他変数の再編
 - 4-5. 他者とのカップリング・システムの産出と持続
5. エクササイズの多様
 - 5-1. 準備
 - 5-2. 即興ダンスにおけるカップリング・経年事例
 - 5-3. 即興ダンスにおけるカップリング・個別事例
 - 5-4. 事例の考察
6. カップリングの成功についての方策と効果
 - 6-1. カップリング・システム立ち上げのための技法
 - 6-2. カップリング・システムにおける接触変数のタイプ
 - 6-3. 相手の動作に介入する部分の見定め
 - 6-4. カップリング・システムの持続および疑似カップリングへの気づき
7. 即興ダンスと自己治癒の接続
 - 7-1. 恒常性維持における自己治癒
 - 7-2. 自己肯定による自己治癒
 - 7-3. 自己表現としての自己治癒
 - 7-4. 動作選択可能性における自己治癒
8. 結論

(2) 論文の内容要旨

舞踏セラピーでは一定の治癒効果が認められてきた。それは「開かれた踊り」ができていて、と舞踏セラピーでは表現される。本論文は「即興ダンス」による舞踏セラピーの効果の因果関係とその実現の諸条件を明らかにする試みである。

申請者によれば、従来のダンス・セラピーの治癒理論はコミュニケーション論、ユング派理論、ダンス機能論、などに基づく研究がなされてきたが、それらは外部観察による研究であり、踊り手自身の変化を捉えられない憾みがある。本論文は踊り手の経験を内省的に記述する立場を取って、カップリングにかかわる実践内容を記述することから自己治癒への因果関係を探る。そのために即興ダンスにおける、①動作の産出構造のモデル化、②他者とのカップリングの産出構造のモデル化、③カップリング成功の方策と効果の提示、④即興ダンスと自己治癒の関係の提示を目標とする。

第2章では、即興ダンスを内的に反省する立場から、踊り手の実存的性格に注目し、ハイデガーの論究に基づき、治癒には自己の本来の存在を取り戻すことが含まれるという仮説を立てる。仮説に基づき即興ダンスの持つ実存的意義と身体運動やカップリングの分析、モデル化に求められる課題を明らかにする。『存在と時間』における諸概念から他者との関係の作り方、気分的存在、本来的と非本来的の二つの存在様態を行き来する自己、実存的決断を必要とする自己などの概念が舞踏のプロセスに有効な説明図式として採用される。また、後期著作の『哲学への寄与』からは原初的な思索の下に、上記概念の生成が、慎ましき、予感といった気分として捉えられ、生命感あふれる気分、自由な開かれた気分を生み出すこと、さらにそれが「内的緊迫性」を伴うことから、舞踏における動作産出の調整機能につながるなど採用される。『存在と時間』での他者との実存的連動は『哲学への寄与』では存在に開かれて可能になると説明され直され、ハイデガーの存在論の概念を組み合わせることから舞踏セラピーの成立過程のモデル化の手がかりを得る。

第3章では、メルロ＝ポンティの身体運動論についての論究を検討する。『知覚の現象学』で提示される身体運動そのものへの考え方、動作産出のメカニズムを検討し、身体図式という概念についても検討する。そして身体を持つ空間性を包摂関係の視点から検討する。さらに身体運動の潜在的可能性について即興ダンスの身体運動の点から、とくに自己と他者の連携の潜在的可能性について確認する。後期の『見えるものと見えないもの』に提示された「肉」、「絡み合い」の概念を運動主体の固有性の確保に重点を置いて理解する。以上から本論文で他者とのカップリングにおけるメカニズムをモデル化するための課題、方向性、肝要な点を提案する。

第4章では、即興ダンスの動作システムのモデル化を行う。個人の動作産出の変化を伴う要素を「変数」と表記し、変数を「恒常的に連動する変数」と「選択的に連動する変数」に分ける。前者に、①注意、②運動感覚・内部感覚の感じ取り、③予期、④身体・運動イメージの形成、⑤配置、⑥寸法・隔たり・方向の調整、⑦反復・リズム化を、後者に、①呼吸の調整、②皮膚感触の感じ取り、③表象イメージの形成、④眼差しの焦点化と分散化、⑤情態性／気分を仮説設定する。それと同時に、他者とのカップリング・システムのモデル化をも仮説設定する。カップリング・システムとは他者の動作と自らの動作が相互に入り合い、連動が持続することである。

第5章では、申請者自身の即興ダンスの実践例の内的記述が取り上げられ、第4章で設定したモデルを使用して考察される。

第6章では、実践例の検討を踏まえ、自己治癒の促進のメカニズムと諸条件が提示される。踊りの中で相手の動作に介入可能な部分と動作の選択可能性拡大を促進する部分が重視される。

第7章では、4章から6章までの考察に基づき、即興ダンスの遂行と踊る者の自己治癒のつながりを考察し、動作産出システムのメカニズム、他者とのカップリング・システムのメカニズムを用い、①恒常性の維持、②自己肯定、③自己表現、④(カップリングによる)動作選択可能性の拡大が自己治癒につながることを明らかにする。

第8章は論文全体のまとめである。

II. 論文審査の結果の要旨

本論文は以下の諸点において高く評価される。

第一に、土方巽に始まる暗黒舞踏系ダンス・セラピーの効果に関する国内における初めての本格的な研究である。本論文にある通り、先行研究では本論文にあるような舞踏の動作産出のメカニズム分析、デュオやトリオでの連動のメカニズム分析、治癒理解につながる人間論、実存論との連携などは行われていない。本論文は舞踏の実存論的分析に基づく、人間理解を理論的に含みこんだ画期的な研究である。このことを可能にしているのは、申請者のハイデガー哲学への目配りである。

第二に、舞踏の外形観察からの研究でなく、踊り手自身の内省的記述を基にしていることである。舞踏をはじめ、ダンスそのものの運動に関する研究は多々見られる。しかし、それらは身体運動の外形観察を基に行われている。この研究手法は客観性においては優れているのだが、舞踏セラピーのように精神的しょうがいを持つ人の治癒とのつながりを考察してゆくには、必ずしも有効だとは言えない。先行研究に見られるように、最初から観察者と治癒者との間に共感が成立することが前提となっているからである。しかし、共感曖昧であり、その対象部分と様態を明確にすることができない。本研究ではこの共感の成立過程を分析することによって、カップリング・システムに参入する踊り手と自己治癒してゆく人との相互関係の成立過程が見事に記述されている。その結果、自己治癒のメカニズムがより実態に即して解明可能になっている。

第三に、前期ハイデガー哲学の実存論的分析概念を舞踏の内的プロセスに適用し、舞踏プロセス理解に実存論的次元を開いたと同時に、ハイデガーの現存在分析による存在論の新たな応用可能性を明らかにしたことである。前期ハイデガーの代表作『存在と時間』の実存論的分析論が、単に抽象的な存在論であるばかりでなく、具体的な自己理解への決意、覚悟を引き起こす可能性を持つことが、舞踏の動作選択の変数設定とのつながりによって示されている。このことから同時に、舞踏というダンスが実存論的分析論によってその意味が理解可能になる現存在の存在様態の一つであること、しかも、本来性を帯びた存在様態として実践され得ることが示されている。

第四に、後期ハイデガーの存在思索を舞踏という具体的場に引き据えて、その現実的意味を明らかにしたことである。このことはハイデガー哲学研究の意味からも重要である。舞踏セラピーにおいて「開かれた踊り」がどのような形態を伴った踊りであるか、客観的な外形をデータ化することは可能だろう。しかし、特定の外形が必然的に治癒を意味するわけではない。人が実存として自らの自然な世界との関係を持てるように、世界から受け容れられるようになるように、人が自らを開いてデュオの踊り相手を受け容れるとき、自己治癒の可能性が起こると本論文では言われる。ハイデガーの後期思想を手掛かりになされたこの理解は、ハイデガーの後期の思索が舞踏セラピーの理解に寄与すると同時に、舞踏セラピーによって存在思索がその具体的姿を現すという、相互関係にあることを示している。ハイデガーの後期思想理解に新しい側面を切り拓いたといえる。

第五に、治癒メカニズムが曖昧だった舞踏セラピーの進行過程を変数と名づけられる動作要素に分解し、それらの相互関係から踊り手の自己治癒のプロセスを解明したことである。これは非常に重要な成果である。ハイデガー哲学による現存在という人間理解に基づく、舞踏の動作選択過程が分析的に明確化され、それらの間の相互影響関係からセラピーが進行し、最終的に存在論的に開かれた状態として他者を介した共世界の中に存在する自己を踊り手が肯定し、それを実現するための動作選択可能性を自由に拡大できる状態を恒常化することこそが、治癒への過程であることを明らかにすることができた。

以上はすべて本論文の特徴と評価である。本論文は舞踏セラピーの治癒メカニズムについて、前後期を通じたハイデガー哲学の概念を用いて捉えなおすという手法を採ることによって、機械論的メカニズムでなく、変化可能性を持つ変数という意味での要素のシステムとして、共に踊る踊り手の立場から内的実感を伴う理論的記述ができた、という大いなる意味を有すると判断される。

よって、本論文は博士学位に十分に価するものと評価される。